

「死んでいたのに生き返った」

2015年10月09日

ルカによる福音書 15章 25節～32節。ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

父親の元に放蕩息子がボロボロになって帰って来た。遠くから息子を認め、抱きしめ接吻した。息子の謝罪も言い訳も聞かず「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ」と言って、僕に命じて、綺麗な着物を着せ、肥えた子牛を屠り、大宴会を催した。そこへ、兄が畑の仕事から帰って来た。音楽や踊りのざわめきを聞き、僕に何事かと問わせた。弟さんが無事に帰られたのを喜び、宴会をしていると知らされ、怒って家に入らなかった。父親が来てなだめたが、「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる」と怒りをぶっつけた。父親の言いつけを守ってきた兄としては、放蕩三昧の弟を無条件に受け入れ、宴会までする父親に納得できないのは当然であろう。すると父親は「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」と答えた。

この譬えは、律法を厳格に守り、神に忠実に生きていると豪語するファリサイ派の人々が徴税人や罪人たちを汚れた者とレッテルを張って、排斥する高慢を諭した譬えである。ファリサイ派の人々は歯ぎしりしながら、主イエスの譬えを聞いただろう。

私は放蕩に身を持ち崩したことはないが、人の親切には甘え、また身を守るため、自分を正当化して、人を傷つけても平気でいたことは数限りない。神は、その私を赦し、宴会に招いてくださるといふ。パウロはローマ書5章20節bで「しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」と書いている。罪にありながらも、大きな恵みに包んでくださる。本当に嬉しく、有り難いことである。アウグスチヌスは『告白録』の中で、「(神よ)あなたはわたしたちを、ご自分に向けてお造りになりました。ですから、わたしたちの心は、あなたのうちに憩うまで安らぎを得ることができないのです」と書いている。神の内に憩う安らぎが生きることに勇氣と力を与えてくれる。他人を排斥することは自分の義の主張である。義の主張の前に、罪人を招く神を知ることである。